家庭に「天幕を張る」
ドメスティシティと「おば」の介入

増田久美子

はじめに

子育てが女性の重要な社会的役割として認識され、「母親であること」が中流階級の白人女性にとって重要な女性性となっていたアンテベラム期アメリカにおいて、女性作家によって書かれた小説では、しばしば主人公の母親が不在とされている。そのような物語で不在の母親の代わりに主人公を養育するのは、血縁関係の有無にかかわらず「おば」という立場の人物である。

子どもを育て、家庭を管理し、「女性の領域」を形成することが「家庭性」の根本的な概念だとすれば、それを実践する、あるいは、その実践の契機となるのは、家庭性の中心的人物であるはずの母や妻ではなく、おばたちであった。本発表では、結婚しないことを選択した「非婚のおば」という女性性に着目し、19世紀前半の女性小説を「おば」と家庭性の関係性から読む可能性について考えてみたい。

１．母の不在と「おば」の登場

18世紀後半の英国社会で母親の重要性が唱えられたとき、多くの小説で母親は逝去した不在者、あるいは育児ができない不能者として描かれた。母親とは一面では「理想的な女性像」として称讃されつつも、同時に「無力化した女性像」でもあったのだ。ルース・ペリーによれば、母親に付与された「理想化と無力化」という矛盾がジェンダーシステムに組み込まれていく過程において、母親の不在とは「女性の本質的な力の欠如」を示した（Perry 338）。その不在の母親に代わって登場したのが「おば」である。若年の女性主人公を迎い入れ、導き、方向づける力強い「おば」の存在は、女性が「力と自立と声」を失ったことの証左として、母親の力の欠如にたいする「矯正力のある幻想」（corrective fantasies）だった（Perry 367, 369）。

英国小説の「おば」が「力と自立と声」を持ち続ける女性性であったように、アメリカ小説においても、自らの意思で結婚しないことを選択した「非婚のおば」――当時の社会で“maiden aunt”や“old maid”と蔑称されてきた女性像――に、同様の女性性を求めることができよう。アメリカでは1830年代から1850年代に非婚のおばを模範的女性として描く一連の作品が現れたが、リー・チェンバーズ=シラーは、育児する母親がテクストから消え、母代わりの「非婚のおば」が登場する物語の背景について、当時の母親業（mothering）の規範にたいする不安や恐れがあったことを指摘している。1830年代までに「男女の領域」を厳格に遵守する家庭性が白人中流階級家庭の重要な価値観となり、ヴィクトリアニズム的な「感傷の文化」の影響によって母親のみの子育てが称揚されていくと、母親の過剰な愛情によって子どもの自立心が阻害され、倹約・勤勉などの共和国の美徳も失われるとの社会的不安や危惧も生じていく。つまり「非婚のおば」とは、実母に代わって「共和国の子どもたちを社会化する」という明確な目標を体現した存在だった（Chambers-Schiller 1988, 34-35, 40）。アメリカ小説にみる「非婚のおば」とは、共和国市民の育成をめぐる「ナショナル」な不安を映し出し、共和国の理念を背負いながら家庭性の概念を実践する女性であったのである。

アンテベラム期に「非婚のおば」が描かれた背景には、ニューイングランド地方を中心に「独身の礼讃」（Cult of Single Blessedness）の概念が存在した点も看過できない。独身の女性たちは、結婚で得られる一時的な幸福ではなく神意によって永遠の幸福を追求するという宗教観から、「高潔な行為」をおこなうことで「恩恵」のみならず「社会的な承認」をも得ることができると考えられた（Chambers-Schiller 1984, 20-21）。「独身の礼讃」は、まさに「家庭性の礼讃」（Cult of Domesticity）の時代の裏面に併存していたのである。また、女性たちにとって、善良で役に立つ「高潔な行為」とは「他者に奉仕すること」を意味した。それは共和国の美徳のひとつであったが、これがヴィクトリアニズム特有の価値観に受け継がれて、アンテベラム期では、女性の精神性や道徳性は男性に優越するとの言説が「家庭性の礼讃」を通して拡大していった。そして、独身の女性たちは「独身の礼讃」を通して「人の役に立つ」ための精神性や道徳性という価値観を獲得したのである。そのような独身女性の特徴は、物語における「非婚のおば」をかたちづくる要素のひとつとなり、彼女たちは子をもつ既婚女性よりも「母親的」な「真の女性らしさ」の模範として描かれたのだった。

２．「非婚のおば」たちの物語

マーガレット・フラーは「非婚のおば」という女性性を肯定的に表明したひとりである。著書『19世紀の女性』（Fuller, *Woman in the Nineteenth Century*, 1845）のなかで、「オールドメイドと蔑まれている人びと」への「嫌悪」という一般的感情に対抗して、子育てに携わってきた「おば」や「おじ」の重要性を次のように主張している。

> Yet the business of society has become so complex, that it could now scarcely be carried on without the presence of these despised auxiliaries; and detachments from the army of aunts and uncles are wanted to stop gap in every

hedge. They rove about, mental and moral Ishmaelites, pitching their tents amid the fixed and ornamented homes of men. (Fuller 57, underline mine.)

ここでは、独身礼讃で示された独身女性の精神性や道徳性や、おばたちが親に代わって子を養育するという彼女たちの有益性が「社会的役割」として見いだされるが、同時に気づくのは「さすらい人として流浪し、安定し装飾された家々に囲まれた自身の天幕を張る」という新たな「おば」像が提起されている点である。これをキャサリン・マリア・セジウィックの描くおばの物語に突き合わせてみよう。じつに興味深いことに、両テクストは「非婚のおば」という女性性をめぐって共鳴しあっているようなのだ。

セジウィックの短編作品「オールドメイドたち」（Sedgwick, "Old Maids," 1834）は、4人の「非婚のおば」たちの生き方を語る物語である。彼女たちはいずれも自身の「世俗的な」幸福を捨てて母親のように誰かを育て、他者のために善を尽くした人物である。「かつて、もっとも愛情を注がれた女性」でありながら「二番手に成り下がった立場」（a subordinate and *second bes*t position）に置かれた彼女たちに期待されるのは、「忍耐強さと自己犠牲、そして慈悲という精神」(19) であり、まさに独身礼讃で謳われた精神性である。さらに「友人たちの家族の家に移り住んだ」(18) という記述によって、自身も非婚のおばとして生きてきたセジウィックの自伝的要素が含まれていることがわかる。この「他者の家庭に移り住む」おばこそが、フラーの語る「天幕を張る」おばに重なり合っていよう。彼女たちは自身の家庭をもつことなく、他者の家の内部にそっと入り込んでは、また別の家へ行くために密やかに出ていくような、流動的で自由な主体である。フラーが表現する「安定した」家庭とは対照的に、他者の家々に「囲まれて」張られている一時的な仮宿としての「天幕」とは、おばたちの移動性・流動性そのものである。育児や家事などの「役に立つ」技能をもち、他者を奉仕する精神性に突き動かされて家から家へと移ろい、家庭性の理想を実践していく彼女たちは、家庭にとって完全に内側にいる存在でも外側にいる存在でもない非領域的で可動的な主体であり、まさしく「道徳的なさすらい人として流浪する」おばたちなのである。

おばたちの他者に向けられた精神性は、家庭の外部にも広がりを見せる。たとえば、A・J・グレイヴズの作品（Graves, "Mary and Ellen Grosvenor, or The Two Sisters," 1844）では、私的な家庭空間が外部へと開かれる教育の場となることが描かれている。堅実で自立心に富む姉のメアリは（結婚を否定して）非婚の生き方を選び、いっぽう、世間知らずで空想的な妹のエレンは、若くして不幸な結婚をしてしまう。エレンの夫が死去すると、メアリは衰弱したエレンとそのふたりの娘を迎え入れ、妹と姪たちのために「かつて幸せだったわたしたちの家で学校を開く」ことを決意する。メアリとエレンはかつての家庭で「再会する」——文字通り「ふたたび、ひとつの家庭で結ばれる」（"re-united in one home" 50）——ことで、家庭の再生が示唆される。さらに姪という新たな世代も迎え入れて、「おば」のメアリは家庭を学校という開かれた場にする。

この物語のように、他者に奉仕する「おば」の役割は、家庭を閉じられた空間にすることではなく、むしろ、外へと開かれた空間にすることにある。家庭性の概念は、私的な領域を形成することで逆にその場を公的な場に変えていくというパラドクスを内包しており、そのパラドクスは私的な存在とされた女性たちの社会的関心を共有・連帯・組織化させ、やがては社会改革に挑む女性たちの原動力にもなっていった。「おば」の他者への奉仕は、家庭の内部に向けられたときに「母親」として若い世代を育むが、その精神性が家庭を基盤に女性どうしを連帯させ、家庭の外部にも向けられれば、家庭はもはやたんなる私的な領域であることをやめ、社会との接続点となる。その接続点に立って家庭の中と外を自由に往来できる女性は、「精神的かつ道徳的なさすらい人」として家々を移動する「おばという女性性」（aunthood）なのだ。

おわりに

アンテベラム期の物語に描かれた「おば」とは、不在の母に代わって子どもを養育し家庭を管理することで、家庭を私的な「女性の領域」とする家庭性の教えに従いつつも、家庭を外部に開かれた空間に変えていく者、いわば「家庭性のパラドクスの実践者」でもある。家庭の領域形成を担いながら、自らは非婚を選択することで社会的に要請される家庭のあり方を否定する——まさに「おば」とは、家庭性の信奉者であるのと同時に、大胆な背信者ともいえるであろう。

Works Cited

Chambers-Schiller, Lee. "'Woman is Born to Love': The Maiden Aunt as Maternal Figure in Ante-bellum Literature." *Frontiers*, 10 (1), 1988: 34-43.

Chambers-Schiller, Lee Virginia. *Liberty, A Better Husband: Single Women in America: The Generations of 1780-1840*. Yale University Press, 1984.

Fuller, Margaret. *Woman in the Nineteenth Century*. A Norton Critical Edition. W. W. Norton, 1998.

Graves, A. J. "Mary and Ellen Grosvenor, or The Two Sisters." Susan Koppelman (ed.), *Old Maids: Short Stories by Nineteenth Century US Women Writers*. Pandora Press, 1984: 39-50.

Perry, Ruth. *Novel Relations: The Transformation of Kinship in English Literature and Culture, 1748-1818*. Cambridge University Press, 2004.

Sedgwick, Catharine Maria. "Old Maids." *Old Maids: Short Stories by Nineteenth Century US Women Writers*, 11-26.